月冴押見の散歩

我が家の鼠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月冴押見の散歩

【Ｎコード】
Ｎ２３５２Ｓ

【作者名】
我が家の鼠

【あらすじ】
トイレのレバーが異世界への入り口だった。
月冴押見（彼女いない歴＝年齢）が異世界に飛んで親切なおやじに助けられ鍛えられていく話。更新はかなり遅め。

トイレのレバーは異世界の・・・（前書き）

まあなんだ、あれだ。

トイレのレバーは異世界の・・

今日は日曜。特に予定もないし、勉強するほど押見はまだ遅れてない。進学？そんな選択彼の頭の中には
存在しない。
で、彼は友達の桃威（とおい）の家に来ていた。桃威の姉の名前は璃咲（りく）がいて
大学生である。
あ、押見は高校生ね。誰視点？誰視点でもないです。そして今日。
押見と桃威とその友達である神衣（かむい）は何故か璃咲にファーストフード
店に呼ばれたのでただいまバイパスを横断中。
「で、璃咲はなんで呼んだと思う？」
話を始めたのは桃威。
「たぶん・・・・頼みすぎじゃないかな？」
・・・・・。３人にとって「頼みすぎ」と「買いすぎ」はトラウマ
だった。
何年か前、璃咲がバイトをしはじめて。
「最初の給料で何かお前らにおごる！！。」
と叫び。彼らはその時喜んでいた。で、今日のように呼ばれて行っ
てみたら、テーブルを五個ほどつないで璃咲が待っていたのである。
結局食べ終わるまで５時間ほどかかったという謎の思いで。
「いや、今回はそうじゃないはず。きっと勉強のことのはず！！。」
そうであっていたい。今喋ったのは神衣。
～ネック～
あの有名なネクモナルモに到着。
見間違いではなければ璃咲の座っている席の目の前にはハンバーガ
ーの山がある。
他の客は「すげえ。」とか「あれを一人で食べるのかな？」などと
ささやきあっていた。
彼らは小声で。

「おい・・・ばれないうちに逃げよう・・・。」
「残念だけどもう遅いわ。」
璃咲はこっちを向いて手を振っていた。
押見は無視して帰ろうとするが、いつの間にか近くに移動して来ていた璃咲にあっさり取り押さえられる
「どうして逃げる!!。」
押見は掃除してあるか分からない床に押さえつけられ。何故か桃威も神衣が協力して押見をハンバーガーの山に引きずっていく。
「無理!!俺は食えん!!。」
〜1時間後〜
やはり何年か前はまだ中学生だった彼らはもう高校生なので、前よりも速く食べ終えた。
「もう、駄目だ・・・・。ちょっとトイレよってくから（大）、みんな先帰ってくれ。」
押見はトイレに行くようだ。
〜排泄終了〜
彼が大のレバーを引いた時だった。
彼は気絶（ブラックアウト）してしまった。
〜？〜
押見は目を覚ました。そしてトイレの中にしてはやけに寒い。そして、床でなく土に倒れているのに気づいた。
（なにこれ・・・・。もしかしてあれか？異世界ってやつか。）
押見は立ち上がりあたりを見回す。そして自分がズボンを下ろしたままだったということに気付いた。
（ここは山か？可愛い魔法使いが俺を召還したのではなく。俺は山に来たのか。）
グルルルルル・・・・。
唸り声。
押見は何となく分っていたが後ろを見る。やはり、巨大な黒い塊。
獣だった。

（ヤバい・・・・・これは本当にまずい。俺には何の力もないのに。）
獣は牙をむいてこっちを睨みつけている。押見がもし排泄後ではなかったら。大も小も垂れ流していただろう。
（いきなりデットエンドかよ・・・リトライとかありかな？ちょっとメニュー画面開きたい。なんか装備できねえの？）
押見は適当に小石を拾って獣に投げつける。が、獣の隣の隣の木に当たった。
（あ、あきらめようかな？）
その時、獣が押見に向かって飛んできた。
「うわあああ！！頼む！！殺さないでくれ！！。」
日本語で叫ぶと。獣はいきなり立ち？止まった。
（ん？言葉通じた？）
獣はなにやら鼻をヒクヒクさせながら木々の間に飛び込みあっという間に見えなくなった。
（このにおい・・・・何かが燃える匂いだ）
「うｈふぃｓｖしんヴぃおｂすｖｂさｂｖｇｓ！！。」
押見はビクッとして振り返った。松明を持った大男が立っていた。
「ハロー？キャン　エニワン　ヒアーミー？」
と適当な英語で話しかけた。訳をすると聞こえたら返事しろ。になるのだが、謎の言葉を話す大男には全く伝わってないようだ。
「ヴいふぃあｖふゃｆばｊｂｄｈｖｄｖｈ。」
ますます頭が？になる押見。
大男は手招きするとノシノシと歩き出した。
（怪しい人にはついて行ってはいけません、でも緊急時にはＯＫ）
押見は押見はについて行った。
（「疲れた～。」とか言っても何もならなそうだな）
実際かなりあるいて疲れたのだが。大男はたまに振り返ってついてこれてるか見てまたノシノシと歩き出してしまう。
（しかし、ここなんかイイ感じだな）

押見はただなんとなくそう感じていた。街灯もない山道で頼りになるのは大男が持つ松明だけである。
大男について行ってなかったら押見は間違いなく死んでいたのだが本人は気づいてない。
「ぐぐぐえｇｆｇｈｂｖｈｆｙくｖｈかｇ。」
日本語でおｋ。大男は立ち止まり前を指でさす。
そこには山小屋があった。
（掘られさえしなければおｋ）
全く関係ないことを考えている。
山小屋の中は少し寒かった。中は意外と広く。大男が暖炉に火をつけると中は明るく快適になった。
「ｈｆｖｓでゅｖｇひｆヴぇうｓｆ。」
「なんすか？」
「しｂｆｈｓｐｆじぐｂｂｖ。」
「へ～。」
ほんとは何も知らないのに適当に相槌を打つ。
ー訳
「俺はお前に生き残るすべを教えてやろう。」
「なんすか？」
「まずは国の言葉を教えてやらんとな。」
「へ～。」
だいたいあってる会話である。
～大男（名前未定）のスーパー言葉（国未定）教室～
まず。大男は人とのコミュニケーションをとるときに必要な言葉を教えはじめた。
基本的なあいさつ。敬語。簡単の食べ物の名前。
「うぇなるとあいぶくぁ。」
押見はなまっている挨拶（朝）を言う。
大男はうんうんと頷く。あとこっから面倒なので日本語で話を進めて行こう。

「おれ、名前、おしみ、つかさ、いう、よろしく。」
カタコトである。
「うむ。俺はガル・ダルだ。よろしくな。」
「もう一度、頼む。」
速すぎて聞き取れなかったようだ。
「俺は、ガル、ダル。よろしくな。」
丁寧に言いなおしたガル。押見は頷く。
（俺、これからどうなるんだ？）
作者はお前の言葉の暗記の速さに戸惑っている。
～次の日～
「これからお前に生き残り方を教える。」
山小屋を出ると、昨日は暗くて気付かなかったが山小屋の外は広場のように山の中なのに緩い坂で木がなく拓けていた。大男は押見に向かって木の棒を投げる。
「おもい・・・。」（日本語）
「しっかりと持て！！。」
（やばい、なんか怒られた。）
押見は木の棒を構える。よく見ると木の棒は剣の形に掘られていた。
「行くぞ！！。」
「どこに？」（日本語）
大男はその外見に似合わない素早い動きで押見の木剣を木剣で叩き落とし押見を蹂躙した。
「はやい・・・これが新型のモビルスーツの性能か。」（こっちの言葉）
「立て。」
（くそ、俺だってやられてばかりじゃ。）
押見は木剣を拾って大男に向かって振り下ろす。大男が木剣を受け止めた硬い感触が手に伝わる。
剣を受け止めたなら脇に隙ができる。押見は胴を打とうとするがそれもまた受け止められる。

どんなに力任せに木剣を振り回しても受け止められ木剣で叩かれる。
木剣で叩かれるたびに地面に転がり
「起きろ。」
と言われる。
起きてはがむしゃらに突っ込み切り返される。
もうどのくらい経ったのだろうか。押見は動けないほど疲れて地面に寝転がっていた。
（何年ぶりだ、体動かしたの。）
彼はインドア派で部屋にほとんど籠っていてパソコンかゲームかアニメを見ていた。「スポーツなんてできるわけがない。」と彼は言っている。あと彼女いない歴＝年齢である。
「ハクシュン・・・。」
噂をされたらくしゃみをする。
（風邪か？特にチートもない。おそらくこれが現実（リアル）。所詮何処に行っても俺は俺ってことか）
ガルは黙って山小屋に戻ると、一振りの剣と短弓、矢筒を持って出てきて
「俺はこれから仕事に行く。お前は小屋で休んでろ。」
「分った。」
（俺ももうこっちの言葉分ってきたぜ☆）
押見は這って小屋の中に入ると、昼食と夕食が用意してあった。
（つまり夜まで帰って来れないってことだろ？だったら何してていいのか）
A　山で遊ぶ
B　寝る
C　木剣を振っておく。
の選択肢があるとして、押見はたっぷり5分考えてからAを選んだ。

トイレのレバーは異世界の・・・（後書き）

更新の速さ。
まずレイナント→エクソシスト→ルール→これ
になるんで次はかなり先かと思われます。その前に新学期だよ！？
更新できるかのう・・・・不安じゃ。

森の散歩（前書き）

うわ～い。

森の散歩

山で遊ぼう。暗くなったら下りればいいという謎の発想で押見は用意されていた昼食（パンのようなもの）を持ち山に足を入れた。
（マイナスイオンとかいうのがありそうだな。）
日々の疲れを癒して帰りたい。が帰れるはずもないのだろうと押見は分かっていた。押見は軽い足取りで山を登り始める。
何度も滑って転びそうになって擦り傷を作り進んでいくとポツリ、ポツリと雨が降り出してきた
（どんどん行こう。）
押見は何故か先に行きたいと足を速めた。しだいに雨は激しくなってザーと言う音を立てて押見の頭や肩にぶつかってきた。
（なんか楽しいな。そうだあの木に登ってみよう）
押見は一本の大木に近づいた。木に触れるとザラザラとした感じを肌が脳に報告してくる。落ち葉の積もった地面をけり大きな木の枝にしがみつきそこから枝から枝へと登ってい行った。
登れば登るほど気分がハイになる。
強い風が木を揺らしている。
押見は強い風に吹かれながら、びしょ濡れにながら木の幹にしがみついていた
そして不思議なことに気がついた。風がどこから来るのか分かる。
（次は右斜め上から）
すると予想どうり右斜め上から風が吹きつけてきた。
「あはははは。」
押見は何故がトのしくなって笑い始めた。
（木を登るのがこんなに楽しいことだったとは。）
ずっとそうしていたら雨がやんで風が弱くなった。押見はいままで見てなかった後ろを見た。
「すっげえ。」

オレンジの夕日が山を照らしていた。山の木々はさっきの雨の露がついてるからかキラキラと光っている。
彼はポケットに突っこんでいたパンを取り出すと片手で木の幹につかまり片手でパンをつかみ食べ始めた。
味はパンだが少し、いやかなり硬かった。
昼食をすませて押見はずるずると木を下りて行った。
「ふ～。なんか楽しかったな。」（日本語）
日の光は木の葉にさえぎられていて辺りは少し暗かった。彼は小屋に戻るべく下り始めた。
地面は雨のあとでかなり滑りやすいのだが押見は関係なく走り出し、見事に転んだ。
「ぎゃあああああああああああああああ。」
押見がころころとところがっていく。
「らぁぁぁぁくぅぅぅぅじぃぃぃん注ぅぅぅ意ぃぃぃぃぃ！！。」
日本語だから誰も分からんぞ。とつっこみたいがやめておいてあげてほしい。
押見は急に転がるのをやめた。
別にやめたかったからやめたのでもなく。何かに止められたのだ。
「服を洗え。」
ガルだった。
「分かった。」
押見は立ち上がり自分の体を見下ろした。芸人などがよくなる泥まみれだった（うわぁ。きっと顔も泥だらけなんだ）
ガルは樽を持ち山小屋に設置してある井戸から水を汲み押見にぶっかけた。
「ぎゃあ、つめてい！！。」
ガルは逃げる押見を抑えつけて泥がおちるまで何度も水をかけた。

森の散歩（後書き）

なぜちゅうと半端に終わるのか、それは・・・・俺には分からない。

力の源（前書き）

エルシャダイたのしみだぬ～ハッ！！関係ない！！

力の源

「なぜ山に登った。迷っていたら死んでいたぞ。」
なんども狩りや護衛で山を登ったことのあるガルは山の怖さを知っていた。
「なんとなく、だな。」
押見が笑って答えると。
「じゃあ、山での生き方も教えるか。でも今日はもう休め。」
ガルは押見を小屋に入れた。
（今日は久しぶりに疲れたな～。明日は筋肉痛だな。）
押見は目を閉じた。
～夜～
フゥン・・・・・フゥン
という音で目が覚めた。
窓から外をのぞくとガルが木剣を振っているところだった。
木剣が右から左からと宙を流れるように切る。突く。
（あんなに速くできるのか。こんなに重いのに。）
木剣を持ちあげた腕が痛んで顔を歪める。
（きついな。こりゃあの動きを真似するのは今は無理だな。よし、じゃあ動きだけでも憶えよう。）
突然、ガルが動きを止めた。
暗くて押見には分らなかったがガルは目を閉じて当たりの気配を探る。人の声が聞こえたからだ。
ガルは木立の中から人の声と足音を見つけた。
山での音の伝わり方をしらない人が山で何をやっているのだろうか。
嫌な予感がしたガルは木立に入って行った。
～山～
「主をころせばエルフを守る奴はきえるんだよな。」
ガルは気配を消しながらこの５人の貴族の後をつけていた。どうや

ら音の元はこいつらしい。
「らしいな。」
だいたい話が読めてきたガルは静かに背中の剣を抜いた。
エルフは人に嫌われている種族だった。
嫌われている原因は貴族だった。
この世界で魔法を使えるのはほとんど貴族だけで貴族は同じ魔法を使えるエルフを恐れ根絶やしにしようとした。エルフはそれに怒るのではなく。こいつらうぜえといった感じで山にこもってしまったのである。
エルフはやさしいし、絶対貴族を脅かしたりしないのだが貴族はそれを信じず攻撃し続けているのが今、
ガルは流れ者だ。どの村にも歓迎されずにずっと護衛や狩りをして命をつないできた。
エルフには山小屋も作ってもらった。それにこの剣もエルフが鍛えたものだ。
エルフには恩がある。貴族には恨みがある。
（まあ、どっちにつくなんて。決まっていたことだが。）
その時ガルは貴族に一人が背負っている危険物に気付いた。
（魔剣）
魔剣とは
この世界で魔剣はドラゴンなどの強力な魔物を殺す時に使う危険な剣だった。
（だが、俺の敵ではないな。）
貴族でもないのに魔法が扱えるガルは背中の剣を抜き。あたりの魔力を集め出した。
（このあたりは、火の力が多いな。）

力の源（後書き）

昨日は運がよかった。いろいろといいことがありまして。
そこで、押見の力（笑）を思いついたんですね。
押見は強くなくて弱くもない。
そんな主人公にしたいな～と思っているのでたいして使えない弱い能力ですね。
う～ん、どのくらいの強さかと言うと・
重力操作の力に粒子加速装置の名前がついてる人の能力を足したぐらい弱いです。

夜遊び（前書き）

お～い。押見は何処行ったの？

夜遊び

「山の中で夜遊びとは、貴族がすることじゃないぞ。」
ガルは貴族の5人に話しかける。
「誰だ！？」
貴族たちは驚きそれぞれの武器を抜く。
驚くのもしかたがない。足音も聞こえず気配もなかったのにいきなり声をかけられたら誰だって驚く。
「俺は山に住む流れ者だ。名をガルという。貴様らは？」
貴族は苦笑いを浮かべながら
「貴族に向かって、貴様って言うのは。身の程知らずにもほどがあるよな。みんな。」
貴族たちが笑う。
「貴様らは山での声の響き方も知らない素人だ。そんな素人がこの土地の主を殺せない。」
貴族たちは自分たちが何をやろうとしているのか見抜かれて驚いてるようだ。
「それに、その魔剣じゃ、俺すら倒せん。」
ガルは剣を鞘にしまい。ひもできつく縛る。これなら剣から刃が抜けないので
当たり所が悪くなければ死にはしないだろう。それに、ガルは手加減できるぐらいの腕の自信はあった。
「自信があるんだな。おっさん。でもお前は一人俺らは5人。おっさんは魔法が使えない。俺らは使えるんだぜ？」
貴族たちがニヤニヤとしながらガルを見る。
「何か勘違いしてないか？」
ガルは不敵に笑った。
「何を？」
「お前ら、本当にお前ら貴族だけが、魔法が使えるとでも？」

ガルは周りの魔力を集め出した。
（魔法の基礎は。魔力の流れを読むこと。）
ガルは目を閉じ素早く詠唱を始める。
「おい、あいつ。魔法の真似ごとしだしたぜ？」「あはははは」
魔法の流れが読めないまだヒヨっこの貴族が余裕に笑う。
これが大人になっていて賢者と呼ばれるほど強い者なら、ガルの手強さが分かるのだがしかたがない。ガルはやると決めたらとことん叩きのめす。
なので、この貴族たちは最低一カ月（魔法での治療なしでの時間）は寝込むだろう。
「己が力よ炎に変われ。」
ガルを黄色い炎が包む。
「なんだ、あえ。まさか本当に魔法なのか？」
貴族は警戒するがもう遅い。詠唱は終わってしまった。
ガルは炎の中でニヤリと不敵に笑い。
「すべてを呑み込み炭に変えろ。エフリート！！。」
ただ魔法の詠唱するならエフリートは余分だ。
だがガルは相手が貴族なので精霊の力も借りることにしたのだ。
炎の塊が暗い山の中に突如現れる。火はあっという間に広がって行き貴族たちの逃げ場を奪った。
「なんだ。ありゃ。」「おちつけ。こっちには魔剣もある。」「水の魔法で消しちまえ。」
貴族たちはエフリートを水の魔法を使って消そうとするが。水はエフリートの体に触れる前に蒸発してしまう。
「水が弱過ぎれば火に負ける。常識だな。」
ガルはそれだけ言って、押見がいる小屋に戻った。
「・・・・迷惑。」
不意に上から声をかけられた。
「おお、すまんな。だがああでもしないとあの馬鹿は追いかえせんだろう。」

ガルは木の上にいる生き物に声をかけた。
それは、エルフだった。
「でも、あいつらが親に言ったら。親が来るんだよ？」
ガルは笑って
「その時は、俺が親を炭にしてやろう。」
「全然変わってないんだね、ガルは。」
「そうでもないな。」
ガルは笑顔で答えた。

夜遊び（後書き）

いったいガルは何者なのか。
何故押見は異世界に来れたのか。
その答えはこの物語では明かされない。
なぜならこの物語は。
プロローグなのだから。
はい。そんなんで鼠です。
え～と。え～と。もう何故こんな時間帯に投稿してるのかは書いたので。
桃威は？神衣は？
はい。いつかでてきます。

力試し

「ほんとなんだってば。」
「嘘に決まってるだろ。平民が魔法を使えるなんて。」
「しかも山に住んでる流れ者とか。俺らを主に会わせるつもりかよ。」
この前ガルに打ちのめされた貴族5人は、大人数なら勝てると思い、学園の貴族仲間に声をかけたがみんな「無理」と即答してしていた。
まあ、こいつらの嫌われようがうかがえる。
それから・・・・・・・。

何度もガルと戦い。負け続けた。森の木々が色を変え始めて。押見はようやくガルに一本、二本とれるようになっていた。
（あっちは、どうしてんのかな。あいつら、大丈夫かな。）
押見はいつも気になっていた。しかし押見に分かるはずもなかったが。
ガルは遠くを見ている押見を見ていた。
（おそらく。故郷を思ってるのだろうな。どんな理由で、故郷を離れなければならなかったのか。）
ガルは目を閉じた。すると元気な押見の声が聞こえてきた。
「お、ガルもそろそろ年なのかな？」
「俺を気絶させられるぐらい強くなってから、そんな口をきけ。」
ガルはあることを思い出した。
「そういえば、お前が来てからもう1年か。」
押見は目を丸くした。
「そんなに？まだ気の色が変わってばっかだぞ。まだ季節が一回変わったから。4か月ぐらいしか。」
ガルは首を振って
「お前がいたところではそうかもしれんがここでは四季があってな。

1年で変わってくるんだ。」
「へ〜。」
ガルはニヤリと笑い。
「そろそろ。お前の力を試すか。」
それからたっぷり30秒考え。
「町に行くか。」

その一言からしばらくたち。押見とガルは山を降りたところにある町に来ていた。
「ここが町か、意外と広いな。」
押見は感心したように言う。おそらく、こんなに人がごった返してるのはなかなか見ない。押見は埼玉県生まれだからだろう。
「まあ、町はこんなもんだな。俺らが用があるのは。あそこだ。」
ガルはごつい男たちが集まっている建物を指でさす。
「なんだ?」
押見が訊く。知らないから当然だろう。
「あそこは、商人だとかが護衛を雇いに来る場所だと思えばいい。」
押見はしばらく黙ってまた口を開いた。
「貴族を雇った方がいいんじゃないか?」
ガルはうなずいた。
「確かに、貴族の方が強い。だが、雇うのには相当な金がかかる。襲ってくる盗賊も魔法は使えないのが多いし、用心棒などを雇った方がいいんだろうな。」
そうかもしれない。と押見は頷いた。
「さあ、とっとと仕事を探すぞ。」
とガルは一人で建物に入って行った。
「さて、俺もいくかな〜。」
押見は建物の中に入ってみた。ごつい男たちの視線が怖いが（阿部さん的な意味で。）ガルに鍛えられた押見に勝てるのは、ほんの一握りだろう。

「こっちだ。」
ガルは手招きして押見を呼んだ。
押見は男たちをかき分けながらガルの声がしたほうに歩いて行くと。
小柄な男がその体格に似合わぬでっかい荷物をもっていた。
「彼が、我々が王都まで護衛する。メボルだ。」
小柄な男、メボルは軽く頭を下げ
「よろしく頼むぞ。」
押見は
「うむ。」
と偉そうにする。ガルは苦笑しながら
「王都までの道は長い。できれば馬が欲しいですね。それに日持ちのいい。干し肉だとかも。」
メボルが懐に手を入れるのを見てから慌ててガルはつけたした。
「ああ、旅支度は我々がすべて用意します。」
メボルは頭を掻きながら。
「そんなんじゃ報酬以上の金がかかっちまうが。」
ガルはうなずくと。
「はい。それは分かってます。今回の護衛はこの弟子の押見の力を確かめるための護衛です。盗賊の相手はすべて押見が、私はあなとを守ります。まあそんな感じなので、報酬だけを用意しといてください。」
メボルはうなずき
「では私は西にあるクィルトの宿に泊まってますので。明日の朝に来てください。」
「分かりました。」
今度は押見が答えた。
メボルが西に向かって歩き出したのを見送ったら、明日の用意で大忙しになった。干し肉はどんなのがいいなど押見はしらないのでガルに教えてもらいながら買い物をしたからだった。
押見は、ガルに言った。

「もし、生き残れたら、故郷のあいつらに会えるのかな。」
ガルは押見の方を見。それから、太陽が山に降りて行くのをみながら
「もし、か。本当に生き残りたいなら。生き残ることだけを考えろ。」
押見はガルの顔を見ている。
「先のことを考えてると。それに心を奪われる。そして隙が生まれちまう。隙が生まれれば隙をうかがってた奴らに殺されるからな。」
ガルはさっき予約していた宿に向かって歩き出した。
押見は、ガルに言われたことを考えながら、ただ。山に降りていく太陽を見ていた。

力試し（後書き）

ほ～い。なんか時が進むの速いねぇ。そんな感じでもうすぐで寿命が来そうな鼠っす。次回は、なんか戦いますん

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2352s/

月冴押見の散歩

2011年10月8日19時39分発行